

『非日常』

R4. 10. 7

修学旅行の初日、最初の訪問地「東大寺転害門（てがいもん）」でのこと。東大寺で唯一、奈良時代の創建時の姿を残す門（国宝）を背景にクラス写真を撮影し、近くにある昼食会場へと移動しているときです。最後尾を歩く私を呼び止めるおばあさんがいました。「よいお子さんたちですね。一人一人挨拶してくださいました。ぜひまた奈良に来てくださいとお伝えください。」

修学旅行生がたくさん訪れる地にお住まいの方から、このように褒めていただけたということは、この上ない喜びでした。

昼食後、生徒たちは奈良市内の班別学習に出かけました。ある班の道中、お年寄りが転倒されたのを見かけた生徒が「大丈夫ですか？」と声をかけ、荷物を拾い上げたそうです。これも心温まる素敵なエピソードでした。

私たちは学校生活という「日常」の中で、生徒たちがいろいろな経験をし、学び、生きていくための力を身に付けるよう支援しています。そうして身に付けた力の真価が問われるのは、修学旅行のような「非日常」ではないでしょうか。学校生活で身に付けた「挨拶」や「思いやり」は、日常のルーティンの中では形式的になってしまいがちですが、いつもとは違う生活の中でさりげなくできた時、それは本物と言えるでしょう。

本物の「挨拶」や「思いやり」を見せてくれた生徒たち。その他にもたくさんの良さを見せてくれました。帰校式を終えて痛感したのは、修学旅行に行くことができ本当によかったということです。修学旅行実現に向けて尽力していただいた皆さんに心から感謝したいと思います。



転害門にて。左が1組、右が2組。